

中国古代簡牘の基本的分類の研究

高 村 武 幸

三重大学人文学部文化学科 准教授

緒 言

近年の中国古代史研究では、典籍文献史料の他、中国各地から出土が相次ぐ出土史料、なかでも木や竹のふだに文字を記した「簡牘」が重要史料として広く用いられており、簡牘の利用なくして研究の進展は考えられない分野も少なくない。簡牘は、書籍類の他、公文書や帳簿、契約文書、さらには私信や封緘用のものまで、多種多様な種類が存在する。特に公文書や帳簿は、記載内容に応じて様々な書式や用語、いわば「フォーマット」というべき規範が存在することが知られているし、紙に記された史料とは違い、木や竹という素材の特性を生かして、立体的な造形がなされる封緘用の簡牘「封檢」など、形状自体がヴァリエティ豊かな点が特徴として挙げられる。当然ながらこれらの形状や書式にはそれぞれ用途や必要に即した大きな意味がある。古代中国の人々は、そうした意味を十分に理解して、簡牘を作成し書き写したのである。そのため、簡牘史料とは単に記された文字情報以外に、書式や形状といった側面から得られる情報をも利用しなければ、本来の史料的価値を充分には引き出せない史料といえる。

しかしながら、現状をかえりみると、文字情報以外の情報が持つ史料的価値に対する理解や、それを引きだすための研究手法に対する知識が学界全体で共有されているとはいえない。その根本的な原因の一つとして、多種の簡牘史料が発表されているにもかかわらず、それらを全体として包摂し、かつ内容・用途や書式による、機能を中心とした分類にとどまらない、簡牘の形状までをも踏まえた総合的な分類が存在しないことがあげられる。そのため、文字情報以外の情報をも利用しようとしても、特定の史料限りの個別的な分類まではできても、それが他の研究者・他の史料の研究と共有されない、ということになってしまった。現在は、特定の簡牘史料群のみを対象とする個別研究でも、他の多くの簡牘史料群の特徴との比較検討が必要となる研究状況にある。多様な簡牘

を包摂し得る分類があれば、中国簡牘全体を視野に入れるための道標となり、研究深化に寄与するであろう。

そこで本研究では、基本的で汎用性が高く、また今後予想される新種の簡牘出土にも対応し得る柔軟性を有するような、中国古代史研究者に広く受け入れられる形状分類をまず完成させる。さらに、書式や内容の分類を統合させ、従来は存在していなかった「簡牘の基本的分類」案を学界に提示することを最終的な目標とする。

研究の方法

本研究では、現在の簡牘研究の出発点であり、多様な書式・形状を有する 1930・31 年出土居延漢簡（紀元前 1 世紀～紀元後 1 世紀初を中心とする軍政官庁の公文書・帳簿類簡牘）を主要研究対象とし、その他の簡牘類を補助的に検討対象とした。

まず、1930・31 年出土居延漢簡 1 万点について形状を中心とする検討を実施し、形状分類のたたき台を作成した。その後、共同研究者とともに 1930・31 年出土居延漢簡を所蔵する台湾・中央研究院歴史語言研究所へ赴いて、多数の簡牘実物調査を実施した。さらに様々な形状のうち、たたき台に基づいて代表的事例と考えられるもの数十点のデジタル撮影を依頼し、これらを元に形状分類素案を完成させた。続いて、形状の他に注目すべき簡牘史料の要素を抽出し検討した結果、形状を含めて 6 要素に注目した分類を実施すべきことを明らかにし、その中でも特に重要な要素について絞り込んだ内容・機能別分類素案を作成した。これらの素案については、申請者と共同研究者が主要構成員となっている簡牘研究会の席上で、まず中国簡牘・中国古代史の専門家らによる批評を得たうえで修正を行った。次に、形状研究で先行する日本木簡研究者が集まる木簡学会において発表し、批評を受けた後に再修正を実施し、「中国古代簡牘の基本的分類」案を完成させた。

結 果

以上の研究過程を経て構築した「中国古代簡牘の基本的分類」案は、1点の簡牘史料の性格を明示するために、複数種の分類を組み合わせる方式を採用した。簡牘史料の要素を検討する過程で、簡牘史料が複数の史料要素から構成される複合的史料である、という原則が明確になったためである。従来の文字情報のみを中心とする研究でも、実際には文字情報そのものと書式という2種の要素を別個に注目して検討していたのだが、その点の一部の研究者を除き、ほとんど意識されなかった。今回、形状面までを含めて検討した結果として、大別して6種の要素があり、それらを統一的に表示する方式は、簡牘史料の多様さと、複合的史料であるという点から考えて、複雑になりすぎて非現実的であることが明らかになった。

また、形状分類で問題となるのは、木器・竹器と簡牘とを分かちものは何か、換言すれば「簡牘とは何か」という点であろう。一般的に、中国簡牘研究者は文字を記すことを主たる目的として加工された木・竹の製品に限り簡牘とみなす傾向が強いが、一方で物品の封緘に用いられる立体的な形状の簡牘は、文字を記されずに使用された事例が少なくなく、文字の有無にかかわらず木製・竹製の器具としての性格がある。この問題については、文字を書写された木・竹器は、例えばそれが本来は文字を書写することを目的としないものであっても、ひとまず簡牘とみなすという大前提のもと、日本木簡研究の方法にならって、文字の有無によって簡牘とそれ以外を分類するほかないように思われる。狭い意味での簡牘にそぐわないとしても、簡牘の中に木器という分類を設けてそこに組み込む方がよい。文字がなくとも木器としての本質的な機能になら影響はないが、使用者が文字を記した点に注目すべきで、その段階で木器でありながら簡牘類としての性格も獲得したとみなすべきであり、「簡牘」とは「文字の記された木・竹器」と定義しなければならない。

これらの観点のもとに、本研究において完成させた分類は、「形状分類」と「機能・内容分類」の2分類から構成される。「形状分類」は、簡牘を正面からみた側面形状に注目して〇～四までの5大分類項目に分類し、その他特殊な事例に対応するために大分類項目に準ずる項目を3項目立てた。また「機能・内容分類」は簡牘に記された文字情報の内容やその簡牘が果たす役割に注目して、やはり〇～四までの五大分類項目に分類するも

ので、それぞれの大分類項目の下に必要なに応じて複数の中分類・小分類項目が立ててある。以下、大項目を列記する。

形状分類

- 〇…薄型側面形状非加工簡
- 一…左右側面对称形状加工簡
- 二…左右側面非対称形状加工簡
- 三…多面体無封泥匣簡
- 四…有封泥匣簡
- 残…破損簡牘
- 再…簡牘再利用品
- 器…竹木器

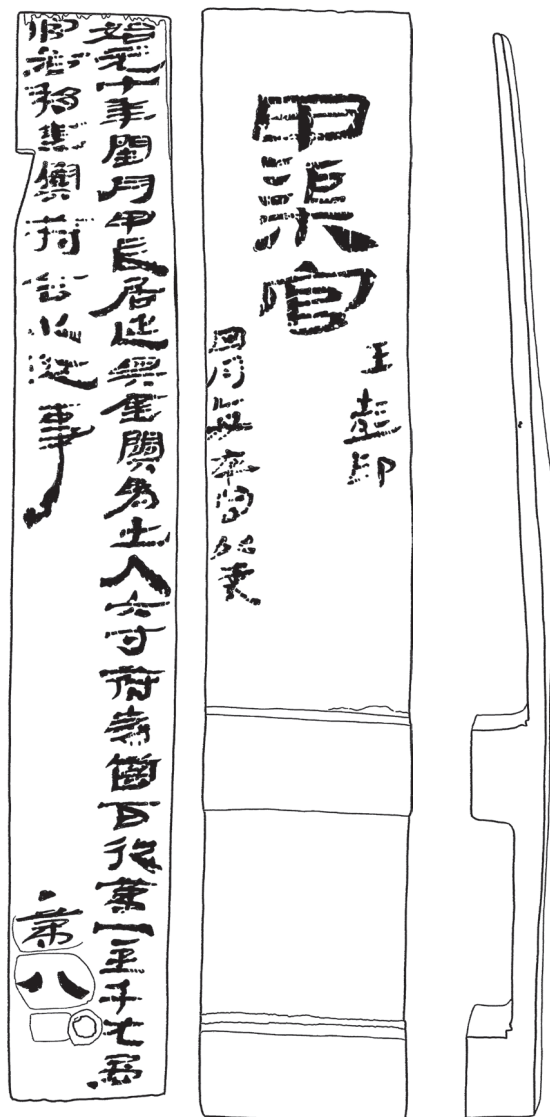


図 1

図 2 (正面・右側面)

図 1 形状二型・機能〇型簡牘の例 (割符文書)
 図 2 形状四型・機能四型簡牘の例 (封緘用簡牘)

機能・内容分類

- …文書類
- 一…書籍類
- 二…簿籍類
- 三…表示札類
- 四…封緘簡牘類

これらの分類案は現在、筆者が所属する研究会において実際に複数の簡牘史料群に対して分類の基準として用いられ、2011年年末から他の研究会構成員により実証試験が実施されている。具体的には紀元前3世紀末の秦代の里耶秦簡（湖南省出土）と、紀元前2世紀末の漢代の居延漢簡・敦煌懸泉置漢簡（内モンゴル自治区・甘肅省出土）という、地域・時代ともに隔たりのある3種の簡牘史料群を対象とし、講読の際に各簡牘の形状や機能・内容を示す指標として実用したところ、この分類で分類できないものは現在のところ存在せず、汎用性の面では有効性が確認できた。

また同一の簡牘をどの分類項目に入れるかについて議論が活発になり、それによって、従来は同一の簡牘史料に対する認識が研究者間で相当程度違っていたにもかかわらず、相互にそれに気づくことないままに相互批評を実施していたことにも改めて気づかされ、研究の深化にも有用であるとの評価が得られた。

謝 辞

公益財団法人三島海雲記念財団より平成23年度（第49回）学術研究奨励金を授与いただき、本研究の遂行が可能となりました。また、台湾における調査では、中央研究院歴史語言研究所の邢義田・林玉雲氏、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の陶安あんど・片野竜太郎氏（共同研究者）らのご助力を賜ることができ、円滑に本研究を遂行することができました。ここに記して謝意を表します。

文 献（代表的な関連文献のみ）

- 1) 羅振玉・王国維：流沙墜簡、中華書局影印、1993年、原著1914.
- 2) 永田英正：居延漢簡の研究、同朋舎、1989年.
- 3) 李均明：秦漢簡牘文書分類輯解、文物出版社、2009年.
- 4) 富谷至：木簡・竹簡の語る中国古代—書記の文化史、岩波書店、2003年.
- 5) 初山明：漢帝国と辺境社会—長城の風景—、中央公論社、1999年.
- 6) 李天虹：居延漢簡簿籍分類研究、科学出版社、2003年.